

教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科文化科学系准教授の松岡智之先生をご紹介します。

松岡先生は、大学院では比較社会文化専攻日本語日本文学コース、また学部では文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コースにご所属です。



実家依存はふつうです
(ただし千年前)

Matsuoka Tomoyuki
松岡 智之

Q ご出身、ご経歴などについて教えてください。

地元は神奈川県の大和市です。大学、大学院の頃は、自宅から都内に通っていました。大学は早稲田大学の第一文学部、大学院は東京大学の人文社会系研究科です。昨年(2012年)4月にお茶大に着任するまでは、11年間静岡大学教育学部に勤めていました。教員養成の学部です。お茶大の前身は東京女子師範学校なので、「旧師範」にご縁がある気がします。また、静岡在住が長かったので、東京は寒いと思ってしまいました。

Q ご専門の内容について、また今の研究分野に興味を持ったきっかけについて教えてください。

『源氏物語』をはじめとする平安時代の日本の古典文学を専門にしています。年がら年中「古文」を読んでいます。古典語の文章は、何十年読んでいてもやはり難しい。しかし、そうであるだけに、文章がわかってくる感じが、他に代えがたくもあります。難解な数行の言葉を、長い時間をかけて何度も何度も読んでみると、はじめは取っつきにくくて、遠くにあったような文章が、ああそういうことかとわかる。これがじつに楽しい。

なぜ『源氏物語』だったのかといえ、作

品世界が好きだからです。光源氏たちの世界には、暴力的な殺人や戦争はなく、洗練された優美な文化がある。もちろん、嫉妬や不安などはたつぷりと描き出されますが…。作中人物に、藤壺、紫の上、明石の君、葵の上、六条御息所、空蝉、末摘花、玉鬘、宇治の三姉妹など魅力的な女性が大勢いて、その一人ひとりが個性的に描き分けられています。人間のパノラマです。おもしろいですよ。また、うねうねとした濃密な文体がやみつきになります。すっきりした文章が好きな人には悪文と見えるでしょうが、私ははまってしまいました。

Q 現在・今後の研究内容についてご紹介ください。

女子大の教員になったためか、これまで以上に、女性の側から多様な視点で文学作品を考えたいと思うようになってきました。例えば、平安貴族社会では、夫実家に妻が同居という結婚形態がなく、通い婚、夫婦同居いずれにしても「妻」は義理の親と同居しません。特に通い婚ならば、妻の実家で子育てです。「実家依存」が当たり前でした。実家と一体の妻がいる一方、夫との関係は、ご存じのように、一夫多妻です。しかし、

夫に執着のない人にとっては、これはこれで案外暮らしやすかったかもしれない。そう思うと、夫と息子のこと満載の『蜻蛉日記』があり、夫・息子の影が薄い『更級日記』もあるという平安時代の文学状況が、改めて興味深く思えてきます。

お茶大の印象、学生に向けてのメッセージをお願いします。

お茶大生は、上品で明晰な人が多いと思います。また、何より文章を書くことが好きな人が多くてうれしく思います。試験答案やレポートを読むのを楽しんでいます。

文責：西川朋美
(大学院人間文化創成科学研究科
文化科学系助教)

